

『天皇と和歌』の提起するもの 田中拓也

鈴木健一氏の著書『天皇と和歌』国見と儀礼の一五〇〇年』

(講談社選書メチエ)は短歌に関わる者として、目を通しておきたい一冊と思う。天皇制と短歌をめぐる問題はしばしば歌壇の話題となるが、これまではイデオロギー的な観点で論じられることが多かった。もちろん、そうした角度で論じることの意義も大きい。著者は国文学者としての立場に徹して天皇と和歌の問題を解き明かしている。著者の天皇と和歌の関係性を見つめる視野は広く、深い。同書の「序章」は「現代の皇室と和歌」であり、「歌会始」をめぐる論点整理を行っている。著者の言を引用すれば「なにかを一方的に拒否したり、逆に無批判に受け入れられないようにということを中心がけたい。」という姿勢が同書を貫いている。同書の構成は先に挙げた「現代の皇室と和歌」にはじまり、『万葉集』の時代、平安時代、鎌倉・室町時代、江戸時代、明治時代以降、和歌文学の未来へとという時間軸となっている。私が特に注目したのは、「天皇」という権威によって保証された「勅撰和歌集の伝統が途絶えていく室町時代から戦国時代の時期の記述であった。

応仁の乱によって伝統的なものが断絶してしまったことの意味は大きい。今日から、日本文化の流れを過去に向けて遠望してみた時、最も大きな断層はこの時期にあると思われる。(中略)勅撰和歌集なき時代において、まず規範を創出したのは、

後柏原天皇(一四六四〜一五二六)であった。そこでは、毎月歌会が催され、充実した和歌活動が行われるようになる。

『古今和歌集』から『新統古今集』までの勅撰和歌集は、まさに天皇の権威と表裏一体のものであった。著者はその歴史を辿るとともに、「応仁の乱」による和歌所の消失、「関ヶ原の戦い」に伴う「古今伝授」の断絶の危機など歴史的事象の中で果たした歴代天皇の働きをわかりやすく記している。

現代人が五七五七七の短詩文芸の豊かさを享受できているのは、万葉・古今・新古今及び明治時代の隆盛によるところが大きいわけだが、室町時代から江戸時代前期までの危機的状況が乗り越えられて、和歌史という一筋の道が切断されなかったことの意味も小さくない。極限すれば、この時期に宮廷歌壇がなかったなら、特に後水尾天皇の歌壇の活動が活発化していなかったなら、現代人は五七五七七の和歌を詠んでいなかったかもしれない。

著者の論に説得力があるのは、これまでの研究史を踏まえて、国文学者の視点で述べているからであろう。同書を読んでいて気付くのは「伝統」という語に寄りかからない冷静な視点である。「伝統」という言葉の媚薬は甘やかであり、同時に危険を孕んでいる。同書を読み、私自身に突き付けられたのは「現代短歌」とは何かという根源的な問いであった。

ちなみに、同書の中には楽しいエピソードも随所にちりばめられている。江戸時代は歌会終了後には、酒を飲んだり、謡を楽しむ文化があったという。また、「象」を初めて見た時の宮廷歌人の創意工夫にも思わず微笑んだ。今も昔も変わらぬ「歌人」の姿を思い浮かべると、この詩型に改めて魅かれる自分がいた。